

(第十三章)

(二無我を) 詳細に説く > 単なる事物の本性が欠如すると示す > 事物が本性として有ることを否定する > 章の著述を説く > [他派に公認される経証によって、本性が無いことを説く]

言う。「苦しみもある。外界の諸事物も有り、それらが有ることにおいて、四様相のみが不合理である。四様相が無かったとしても、先ず、諸事物は良く成立した。」

説く。何？君は幻の象によって行こうとするのか？君は四様相によって為されていない諸事物を、正しく存在すると考えている。ここで、正しいこと自体が捉えられる為の正理を思う。

言う。「ここで、正しいとは何か。」

説く。

「欺く法（現象）は偽りである。」と、
世尊がそう説かれた。
一切の行は欺く法（現象）である。
然れば、それらは偽りである。 1

ここで、世尊が、他の経部より

「欺く法（現象）とは、偽りである。比丘達よ。このように、欺かぬ主体である涅槃とは、真実のなかで最良である。」

と説かれた。その如く、

「真実は一つであり、第二は無い。」

という偈も説かれた。その如く他からも、

「その有為は欺く法（現象）でもある。それは全く壊れる法（現象）でもある。」

と、一切の行は欺く主体であると説かれた。それ故に、一切の行は欺く法（現象）の性であることによって、一切はまさしく偽りであり、それら偽りであるものが、如何様に良く成立するとなろうか。君が「諸事物は良く成立した。」と言ったことは、欲求によって突き動かされたに過ぎない。

章の著述を説く > [そのような解説は不合理であるという反論を斥ける]

言う。「もし、一切の行が偽りであるならば、認識しながらも『一切の事物は

無い。』と、それらを不明にしたことにならないか？」

説く。ならない。

もし、欺く法（現象）であるもの、
それが偽りであることにおいて、何を欺こうか。
世尊がそれを説かれた。
空性を全く示されたのである。 2

もし、「欺く法（現象）」と説かれたものが偽りであるならば、「欺く法（現象）」は、まさしく無い。」と言うことであるので、存在しない欺く法（現象）について、何を欺くことになるのか、更に言いたまえ。このように、無について何を欺くとなろうか。仮に欺くとなれば、自在天派や耆那教徒の財物をも、強盗達が害するとなるだろう。¹そう見るので、「偽り」と説かれたことによって、諸事物が無いと示されたのではない。

障碍²を持たぬ智慧と解脱を得た世尊は、清浄をあるがままにご覧になるので、「欺く法（現象）であるものは、偽りである。」と説かれたことによって、一切の外道が了解しない、有そのものと無そのものの過失と離れた、諸事物の自性がまさしく欠如することを、完全に示されたのである。

章の著述を説く > その経証の意味を他の様相として説くことを否定する > [経証の意味を他に説明する方法を示す]

言う。『偽り』と説かれたことは、諸事物の自性空性を完全に示すものであるとは説かれなかった。しかし世尊がそう説かれたのは、

諸事物は自性が無い。
他に変化することが現れる故である。

『偽り』とまさしく説かれたことによって、諸事物に自性が無いのみであると全く示されたのではない。しかしそれは、諸事物は他に変化すると現れる故と、様相が変化することが現れる故と、確固に留まらない自性であると現れる故に、尽く示されたのである。

もし、如何様にといえば、

¹ 自在天派…だろう。：非仏教徒である自在天派と耆那教（ジャイナ教）徒の修行者は新しく業を積みぬ修行をする為、財物を持たない。

² 障碍：修行の結果を得る障害となるもの。

自性が無い事物は無い。
何故ならば、諸事物は空性である故に。 3

何故ならば、自性が無い事物は無いが、諸事物の空性も示された。それ故に、諸事物の自性は確実に留まらぬ故と、他に変化すると現れる故に、『諸事物は、まさしく自性が無い』と説かれたと理解したまえ。それはただ確実であると、そのように理解したまえ。でなければ、

もし、自性が無ければ、
他に変化するのは、何のものであるか。

もし、諸事物に自性が無いのみであれば、他に変化することは何のものであるとなろうか。『他に変化する』とは、自性より翻ることであるが、そこでもし自性が無いのみであれば、他に変化することも無くなることは疑いの無いことである。しかし他に変化することは有るので、それ故に、自性も有るのみである。」

そのような解説は不合理であるという反論を斥ける>そのように説く理由を否定する>他に変化するものが本性として有る理由を否定する> [本性と他に変化することの二つは矛盾することによって否定する]

説く。もし自性が有るならば、「他に変化するとは何のものであるか。」と言ったことに対して説こう。

もし、自性が有るならば、
如何様であれば、他に変化しようか。 4

もし、諸事物に自性が有るならば、他に相互関係せず自らより良く成立した、変化しない恒常が有るそれに、如何様に他にも変化することが有るとなろうか。他に変化するとは、他に頼る故に変化するのであるが、自性はそうではないので、それ故に、自性において他に変化することは不合理である。

他に変化するものが本性として有る理由を否定する>

[他に変化することが本性として有ることはあり得ないことによって否定する]

言う。「もし、自性において他に変化することが不合理であれば、ならば、自性より他であるものは、如何様に他へ変化しようか。」

説く。

そのものにおいて、他に変化することは無い。
他そのものにおいても、有るのではない。

事物であると尽く考察されるそのものにおいても、他への変化が有るとは不合理であるが、それよりまさしく他であるものにおいても、他への変化が有るとは不合理である。何故かといえは、

何故ならば、若者は老いず、
何故ならば、老いた者も老いない。 5

「これより他に変化する」とは「老いる」である。その「老いる」も、何故ならば、まさしく若者である時期に老いに当たることも無いが、若者より他の老いた時期に（老いに）当たることも無いので、それ故に、まさしくそれにおいても他に変化することは無いが、他そのものにおいても有るのではない。

もし若者が、まさしく若者の時点において老いとなれば、そう見れば老若の二つが、一人と一緒に留まるともなるだろう。それも不合理であり、このように、不一致の二つが一つ（の拠所）に、一緒に如何様に留まるとなろうか。

もしまた、老人が老いた時点において老いとなれば、そう見れば、再度老いと考察されることは無意味となる。このように「老いた」において、老いさせられる何が必要か。老いによって老いたそれが、再度老いとなれば、「彼のそれは、如何なる時点となろうか。」と、それについても、まさしくその思索に随従することになるだろう。

言う。「まさしくそのものが他に変化するが、他は変化しない。例えば、乳は他になった事物であるヨーグルトそのものであるように。」

説く。

もし、それ自体が他に変化するならば、
乳そのものが、ヨーグルトになるだろう。

もし、それ自体が他に変化すると思えば、そのようであれば、君の乳そのものがヨーグルトである背理となるだろう。何故かといえは、「それ自体のもの」であるが、「他のもの」ではない故であり、君が、乳の時点そのものになったヨーグルトという事物について述べたので、然れば乳そのものが、ヨーグルトそ

のものである背理になるだろう。

言う。「乳そのものの事物がヨーグルトであるので『乳そのものがヨーグルトである。』とは言わぬ。」

説く。

乳より他である何の、
事物がヨーグルトであるとなろうか。 6

もし、乳そのものの事物がヨーグルトであるので「乳そのものがヨーグルトである。」と言わなければ、ならば、乳より他である何の事物がヨーグルトであるとなろうか。

ヨーグルトそのものの事物がヨーグルトとなり、ヨーグルトそのものであるのか？あるいは水である事物がヨーグルトとなり、「水はヨーグルトである。」と言ったのか？

そう見るので、それ自体と他も、他に変化することは不合理である。

何故ならば、それ自体と他も、他に変化することは不合理である故に、他に変化すること自体が、有るのではない。

それ故に、「偽り」と説かれたことは、諸事物の自性はまさしく欠如していると尽く示すものであり、自性が確固として留まらないことを示すのではない。

そのように説く理由を否定する>空性が本性として有る理由を否定する> [本義]

言う。「あるいは先ず、空性は有る。対治が無いものは僅かにも有るのではないので、空性は有る故に、空性でないものも有るとなるだろう。」

説く。対治より事物が良くも成立すると主張しても、空であることは不合理である。何故かといえば、空が無い故である。

もし、空でないものが僅かに有るならば、
空も僅かに有るとなるだろう。
不空が僅かにも有るのではないなら、
空も有ると、何処でなろうか。 7

もし、空でないものが僅かに良くも成立するとなつたならば、その対治である空も僅かに有るとなるものであるが、一切の様相において考察したならば空で

ないものが僅かにも有るとは不合理である時、不空が無ければ、空が有ると何処でなろうか。ここで空が有るのではなければ、その対治である空でないものが有ると、如何様に考察しようか。

空性が本性として有る理由を否定する>それについて、経証との矛盾を斥ける> [経典の意味を説く]

言う。「君の言うまさしくそれも主張しない。前述で『世尊がそれを説かれた。空性を全く示されたのである。』³と言ったにも拘らず、『もし、空でないものが僅かに有るならば、空も僅かに有るとなるだろう。』⁴と言うのか。」

説く。ここで怒らず、正理を捉えたまえ。

勝者方が、空性は、
 全ての見解を根絶すると説かれた。
 空性を見解とする者達は、
 成就されようがないと説かれた。 8

清浄をあるがままにご覧になる勝者、聖なる御慈悲を具える方々が、衆生達を利益する為に、「空性」とは全ての見解の、一切の海獣鯨より確かに逃れ出るものであると説かれた。それは一切の見解の海獣鯨を斥けると説かれたので、「見解の海獣鯨が斥けられること」が、事物であるとは不合理である。

例えば、愚昧な心を持つ誰かが、尋香の都に対して『都だ。』と思う分別を起こしたとしても、全くの愚昧を離れて正しいことをあるがままに見る時、都であると思う心が消えれば、「都であるという心が消えた」という如何なる事物も無い。存在しないものに対する分別と離れただけである。

その如く、清浄をあるがままに見る、「事物である（実在する）と見る海獣鯨であるものより反する空性」というそれに、「空性」という如何なる事物も無い。「空性」とただ述べられる以外ない故に、空性を事物であると視る彼等が、無知の大きな闇によって知恵の目が覆われたことによって、成就され得るか、成就され得ないかと分析したことは、偉大なる医師である勝者方によって、「それらはまさしく成就されようがないのである。」と説かれた。

何故かといえ、諸事物は自らの自性として有るのではない。」と思い込む彼等に、『空性』と述べられるこの縁起生によって、因縁の力に従って事物は名付けられたのであるが、諸事物は自性として有るのではない。」と、諸事物の自性を良く示したならば、その思い込みを斥けることができ。しかし、空性を

³ 『世尊が…である。』:『根本中論』第 13 章 2 偈。

⁴ 『もし…だろう。』:『根本中論』第 13 章 7 偈。

まさしく事物であると思ひ込んだ彼等へ対しては、他の何によってもその思ひ込みを斥けることはできない。例えば、「何も無い。」と言ったならば『何も無い』そのものをくれ。」という者に、まさしく無いことを納得させることが如何様にできようか、というが如くである。そう見るので、然れば、十力を具える勝者、大慈悲をお持ちになる方によっても、まさしく治しようがないと説かれた。

空性も空であるとする、真如を見る者達にとっては、空性であると成立した。

事物が本性として有ることを否定する > [章の名を示す]

「真如を考察する」という第十三章である。